

The Owl and the Nightingale の英語

佐々部英男

一

R. Lynd は “The Nightingale Arrives” というエッセイで、Surrey 州 Abinger Hammer の村にナイチンゲールの声を聴きに出掛けた折の野鳥観察記を綴って、次のように述べている。

It would be fairly easy, I imagine, for the Government to prepare a nightingale map of England, which would be almost as accurate as an ordnance survey map.

ところで、英文学にナイチンゲールが訪れるのは、何時頃からであろうか。研究社『英語歳時記』では、「英詩でナイチンゲールがうたわれるようになったのは一三世紀の後半から」としているが、特に作品名を挙げていない。一三世紀には *The Thrush and the Nightingale* といった詩もあるが、内容的にも量的にも遙かに重要なのは、こゝで扱う *The Owl and the Nightingale* (一七九四行) であろう。

中世英文学にかんして最も造詣の深かった学者 W. P. Ker がこの詩について、

‘the most miraculous piece of writing, or, if that is too strong a term, the most contrary to all preconceived opinion, among the medieval English books’^③

という評価を下したのは、注目すべきは、この詩について‘miraculous’という形容辞は、今日この時代の標準的な選集 *Early Middle English Verse and Prose* や J. A. W. Bennett の著述にみられる。更に Ker は、‘This is the most modern in tone of all the thirteenth-century poems’^④ である。

成立年代については諸説があり、K. Huganir^⑤ はこれを推定年代に Henry II (1154-89) から Edward I (1272-1307) になる五代の国王の治世にわたっている。十三世紀後半より早まることは略確実で、前記 Bennett や C. L. Wrenn は一一九〇年代としている。OED は一二五〇年以前という漠然とした成立年代を与えているが、この作品が eME の key text であるだけに、やや物足りない。

猶 *nightingale* という語が OE *niht* (night) + *gale* (singer), *f. galan* (to sing) からであるのは周知の事実だが、G. Nachtigall などと違って euphonic ‘n’ が入っているのは、この詩の現存する唯一つの写本 MS Cotton Caligula A ix (以下 MS C 略す) 以外の MS Jesus College 29 (MS J) からである。但し MS C は一六例中一〇例まで ‘n’ の入った形であるのにならして MS J では一例を除き ‘n’ の入らな *nihtegale* である。いずれも十三世紀の写本で、W. P. Ker の甥にあたる N. R. Ker によって facsimile^⑥ が出版された。

二

OE 詩との相違は、冒頭の一二行で一目瞭然であろう。

The Owl and the Nightingale の物語

Ich was in one sumere dale

In one supe diȝele hale ;

Iherde Ich holde grete tale

An hule and one nytingale.

Pat plait was stif an sterc an strong,

Sunwile softe an lud among ;^⑨

An eiper aȝen oper sual

An let pat uel mod ut al ;

An eiper seide of operes custe

Pat alreworste pat hi wuste ;

An hure an hure of operes songe

Hi holde plaiding supe stronge.

私が日当りのよい谷

大変ひそかな場所にいると

梟とナイチンゲールの

大口論が聞えてきた。

その論争は烈しくきびしくすすんでいへ

時には低く時には高く

お互に腹一杯の

敵意を吐きだし、

お互の性^{まね}について

知るかぎりの悪態をついた。

とりわけお互の歌について

大変すさまじい論争をした。

詩形についてみると、二行づつ（冒頭は四行）正確に脚韻をふんでいる、一行の前半と後半を頭韻で結ぶ OE 詩の根本原則は見当らず、僅かに頭韻句 (5 *stif an sterc an strong*) が見られるに過ぎない。

語彙については、ここで使われている六九語のうち、九回の *an* (*and*) と四回の *one*, *an* (*a*) を含めて、五八語は、綴、意味の違いはあるにしても、今日でも普通に使われる語である。多少とも今日と語形・意味の違う語を順に列挙する。

Ich (I), *one* (a), *sunere* (summer), *Iherde* (heard), *holde* (to hold), *grete* (great), *tale* (i.e. debate), *hule* (owl), *Pat* (that), *plait* (plead, plea), *stif* (stiff i.e. hard), *an* (*and*), *strong* (i.e. fierce), *sunwile* (somewhile i.e. sometimes), *lud* (loud), *among* (i.e. from time to time), *eiper* (either), *ayen* (against), *oper* (other), *sual* (p. of swell i.e. was puffed up), *let... ut* (let out i.e. let loose), *uel* (evil), *mod* (mood), *ut* (out), *al* (all), *seide* (said), *alreworste* (worst of all)

これにたいし、今日 obsolete になった語は、

supe (2, 12 very), dizele (2 secret), hale (2 corner), starc (5 fierce), custe (9 character), hi (10, 12 they), wuste (10 knew), hure (11, especially)

である。これらの語は、いずれも OE 起源で、dizele (2) は *Beowulf* や *Grendel* 親子の棲家の描写 (1357) にも見られる。hure < OE *hurn* は hure and hure (i.e. especially) という句については、*OED* 最後の例である。外来語としては、フランス語からの plait (5) plaiding (12 debate) という結局は同じ語だけである。

要約すると、

- 1 詩形については octosyllabic couplet が定着している。
- 2 頭韻は本質的な役割を果していない。
- 3 語彙については、今日でも普通に使われる基本語彙が、八割以上を占める。
- 4 外来語は僅かである。
- 5 OE 起源で ME 期に obsolete になった語も或程度見られる。

以上は冒頭の一二行についてであるが、一応の目安になるであろう。これらの点を、作品全体について検討し、更に冒頭には見られないこの詩の表現の特徴を紹介したい。

三

その前に *OED* にふれておく。というのは *MED* が当分未完である以上、この詩の言語をしらべるのに、最も役立つのは *OED* だからである。*OED* はこの作品を非常によく利用し、殆ど各行の目ばしい語を引用してい

る。筆者の気づいただけでも、この作品からの用例しか挙げていない語も三八はある。もっとも *MED* が完成すれば、この数字が大巾に減るのは確実で、この数字にこだわる必要はない。但し次の語は *MED* でも他に見当らない。

Ho quap, 'Pu attest Nyingale,
Pu miytest bet hoten galegale. 255-6.

彼女(梟) 曰く「お前さんは夜啼鳥だが、
なみきどり
啼啼鳥といった方がよさそうだ」

galegale は *nytingale* をもじった、作者のユーモラスな造語であろう。

Site nu stille, chaterestre!
Nere pu neuer ibunde nastre. 655-6.

おだまり、おしゃべり女、
こんなにしばれたことはないだろう。

前と同じく、梟がナイチンゲールのおしゃべりをたしなめる一節で、*chaterestre* は *chatterer* の女性形^②。次行の *nastre* との韻の都合もあるが、中世の文学的伝統ではナイチンゲールは女性扱いである。実際に鳴くのは雄だけで、*Lynd* のエッセイでは代名詞は *He* かである。猶、この詩では、鷹以外の鳥はすべて女性代名詞

heo, ho, he がつけられている。

既に述べたが、OED ではこの詩の年代を a(n)te 1250 としているので、用例が *Ancrene Riwe* などよりも後にくるが、Bennett や Wrenn のように一一九〇年代とすれば、順序が変わることも考えられる。MED は C. 1250 としている。この時代の語彙について初例ということは、余程慎重な検討が必要であろう。

四

Anglo-Saxon Chronicle は OE から ME への英語の変遷を跡づける上に恰好の資料であるが、詩形に关しても興味深い。即ち、九三七年の項^⑭にある Brunanburh の戦勝を歌いあげた詩は、明らかに頭韻をふんだ OE 詩であるが、一〇八六年の項^⑮にある William 征服王をうたった三七行の詩では、頭韻は見られず、大体二行づつ脚韻をふんでいる。OE 文学にも *The Rhyming Poem* といった詩もあり、脚韻にたいする好みも見られるが、頭韻が第一原則であった。脚韻が第一原則になっている点でも、William 征服王についての詩は明らかに ME 詩である。*The Owl and the Nightingale* のオリジナルは現存の写本以上に正確に脚韻をふんでいたと推定されているが、この美事な脚韻の背後には、かなりの伝統があったように、筆者には感じられる。

N. Davis ^⑯ & E. J. Stanley & dome-to me (545-6) come-to me (1671-2) とつた Chaucer や Gawain-poet を連想させる脚韻が見られることを指摘している。この詩が Chaucer より百五十年近くも古い詩であるのを考えると、注目すべき事実かも知れない。

もっとも、脚韻をふむために、やや特殊と思われる語を使ったふしもある。次の二例では MS C と MS J で別の語が見られる。

Wundere me þungþ wel stanc an stor

Hu eni mon so eaur for

þat e his heorte miȝte driue

To do hit to opres mannes wine. MS C. 1473-6

人の女房に手をたすような

変な氣をおこす男がいたとは、

私には摩訶不思議に思われる。

一行目の stanc and stor は度々使われている頭韻句 stanc and strong (5, 524, 1176) の変形である。この場合

問題は、stanc との頭韻をふむと同時に、次行の for と脚韻をふむことである。とすれば ON からの stor 以外、考えられない。stor は非常に特殊な語ではないが、MS J では stark and sor と書き間違えられている。

同じことが、次の一節についてもいえる。

Ac abid, ȝete nopeles

þu shalt ihere an oper þes. MS C. 747-8

しかし、待て待て、

お前さんにもう一つ聞かせてやる。

問題は二行目の *pes þe* の *crux* の説明は Bennett の註釈にゆずるとして、この語が判り難い語であったことは、MS J では別の筆跡で *bles* としてあることから窺われる。

五

‘Rhyme is an essential feature of the verse of O & N; alliteration is an added grace’ とする Stanley の言葉通りに、頭韻について言うべきことはすくない。既出の *stif an starc* といった頭韻句は時折現われ、なかには *warp a word* (45 *threw* i.e. *made a speech*) のように、‘common Germanic poetic stock’ に属する句もあるが、全体として平凡の感を免れない。

一寸注意されるのは、OE 詩によく使われていた語原的に奇妙な頭韻句が、MS C では *wepmon and wimane* (1379) として残っているのじ、MS J では *mon and wynnmon* となつて、頭韻が失われたことである。*OED wapman* の項にあるように、語頭の *wep-* は譬喩的な武器で、女性と区別して、男根をつけた人間という意味である。*Beowulf* (1284) をはじめとして、真面目なコンテキストで使われた語であるが、頭韻の必要が薄れるとともに廃れた。*man* という語の持つ二重性^④（人間・思）をアングロ・サクソン人も或程度感じていたのかも知れない。*OED* では一二七五年が最後の例である。

いま一寸気がかりなのは、‘1’ の頭韻である。Stanley は

Pat dusi lune ne last noyt longe. 1466

愚かな愛は長続きしない。

を引用している。これと比較されるのは、聊か露骨な例だが、

Habbe he istunge under gore

Ne last his lue no leng more. 515-6

衣の下に突きさしてしまえば

下司の愛なんてそれっきりさ。

厳密な頭韻句ではないにしても、love, last, long といった語は、頭韻の上でも、意味の上でも collocable である。

六

語彙について先づ注意しなければならぬのは、大体において日常の基本的語彙で書かれていることである。一見平凡な事柄であるが、中世の文学史的コンテキストで考えると、重要な意味を持つてくる。この点を強調したのは、C. L. Wrenn であつた。

The poet, while following French model in form and much of his technique, is the first in English to seek a language for poetry of the kind Wordsworth was later to strive after—"a selection of the language really used by men"—in conscious protest against the more artificial style suggested by incoming French models culminating in the highly literary *Roman de la Rose*

同教授の著書 *The English Language* の次の一節も、この詩を念頭において書かれたことは明白である。

.....he [i.e. Wordsworth] was in some measure continuing a tradition of familiar language in certain kinds of verse, which had existed at least since the twelfth century, and in which Chaucer had excelled. ③

同時にこの詩が論争詩であって、梟とナイチンゲールの烈しいやりとりを、生き生きと表現するためにも、日常卑近な言語が最適であった。OE 詩の詩語の拘束のもとでは、このような詩は生まれなかったであろう。

七

外来語については、既に一九三五年に Mary Serjeantson が *A History of the Foreign Words in English* で、この詩に見られるフランス語・北欧語からの語彙を列挙している。フランス語について、女史のリストは殆ど完璧といえるが、三つの点に注意したい。

第一にテキストの解釈によって、僅かながら外来語の数が違ってくる。この詩の一七行目ナイチンゲールのよんでゐる生垣について、MS C では *ore waste picke hegge* (荒れ茂った生垣) とあるが、MS J では *ore naste picke hegge* (堅固な茂った生垣) とある。女史の採用している *waste* ならばフランス語からだが、*naste* は OE *faest* から来て、'Southern voicing' によって語頭が有聲になった本来語である。

同じことは語原の解釈についてもあてはまる。女史はリストのなかに *kukeweld* (1544 cuckold) を恐らく意識的に入れていない。しかし、Wyclif の *UED* は別として、*OED* をはじめ大抵の辞書はフランス語起源としている。

最後に、「一番賛成しがたいのは、*O & N* contains but few French words; nor are these of great interest」^⑧ という女史の結論の後半である。前述の *kukeweld* は *OED*, *MED* など例が断然初例である、*kukeweld* にはつきものの *gelus* (1077 jealous) も同様である。また *Chaucer* のいくつかの物語の key words など、この作品に始めて現れることになる。

他に目ぼしい語を拾ってみると、夫婦関係の語は *spuse* (1334, 1527 spouse), *spusing* (1336, 1340 matrimony) は初例ないし初例に近い。この詩に *legalistic flavour* を与えている法律用語は *plait* (5 pleading), *bataile* (1197 trial by battle) 鳥類は *faukun* (101 falcon), *pie* (126 magpie) 動物は *ipeint* (76 painted) がいずれも初例である。certes (1769 certainly) といった副詞や、珍しい誓詞 *dahet* (99, 1169, 1561 ill luck) も注意される。disputing (875) という語自体も見られる。

このように見てくると、フランス系の語彙がすくないということは、作者がフランス語フランス文学に疎い詩人であったということにはならないであろう。既に引用した *Wrenn* の文章にも *'in conscious protest'* があったが、やたらに外来語をふりまわさない点に、この詩人の見識が伺われる。

同時に、*Smithers* も指摘するように、フランス系の語彙の比率は、文体と関係んづけて考えるべきで、*colloquial* な文体では、当然フランス系の語彙はすくなくなる。

北欧系の語彙となると、英語と同じゲルマン系であるだけに複雑である。*Serjeantson* は二三語を挙げるのに

たいし、北欧の学者 Sundry は二〇語としている。次に Dobson の指摘する「南東部方言に見られる北欧語」という問題がある。これらの問題を掘り下げるには、筆者の知識が不足するが、Dobson は *ille* (421 adj. ill, evil) に注目している。この語は Chaucer も意識的に北方方言をとり入れた箇所以外使っていない。stor (1473 great in degree) については既に述べた。hybrid にはあるが *lahfulness* (1741 lawfulness) は初例である。sk- び始める一れんの語 *seklie* (186 skill, i.e. reason), *skente* (1085 to entertain), *skentinge* (446, etc. entertainment), *skere* (1302 to clear of a charge) もあるが、*nai, nai* (543, 856, 1670 nay) という否定辭の繰返しは効果的である。

Nai, nai! nauestu none miȝte! 1670

いやいや、お前さんに力なんかあるもんか。

この一行では否定が四度重なっている。OE からの *na* (no) では弱いようにも思われる。

ウェールズ語となると完全にお手上げであるが、Wrenn 教授の説を紹介しておく。

この詩の一一三〇行あたりに、梟は死んで案山子となって人の役に立つとあり、穀物を食い荒す鳥の名が列挙してある。

Pinnuc, golfinc, rok, ne crowe. 1130

問題は *pinnuc* び 今日この詩の標準的な Stanley のテキストでは *pinnuc: hedge-sparrow* となっている。この *hedge-sparrow* (かやへぐら) には *hei-sugge* (505) という語が使われている。Wrenn は *pinnuc* を

ウーホルズ語 *pinch*: *finch*, *chaffinch* と比較して、*chaffinch* とすれば、この一行は *rok* (*rook*) と *crow* にたうじ、*chaffinch*, *goldfinch* と似た類を集めたことになり、殊に *finch* 類は穀物を食う鳥とされているので、このコンテキストには相応しい。

八

Beowulf のはじめに *healsgebedda* (63) という優雅な詩語がある。「頸 (*heals*) をまいて共に (*ge-*) 臥す相手」といった意味で、この詩以外にはない。*heals* をとった *gebedda* も大体同じ意味で、OE 散文にも使われている。この *gebedda* が ME では *ibedde*, *bedde* となるが、*ibedde* は OED, MED などこの詩の例 (968, 1490, 1570) だけである。*bedde* の方はこの詩の例 (1500) 以外にも MED にはあるが、いづれにせよ消える運命の語であったことは、語尾が更に弱まれば、*bed* そのものとなってしまふことから察せられる。この詩では同じ意味をあらわすのにフランス語からの新しい *spuse* (*spouse*) も既に使われている。このように消える運命の語が約六十あり、数の上では外来語に略匹敵する。

複合語としては *eardingstowe* (28 *dwelling-place*), *faestrede* (211 *firmly resolved*), *dairim* (MS C 328 *rim of day, dawn*), *rumhus* (592, 652 *roomy house, privy*), *griþbruche* (1734 *breach of the peace*) など注目される。*eardingstowe* は OE で普通の語だが、MED では最後の例である。*faestrede* (OE *faest-ræd*) も *Beowulf* (610) に見られるが、MED 唯一の例である。*dairim* も最後の例になっているが、OE では散文でも使われている。次の二つは OE 起源ではない。*rumhus* はニーモラスな起源だが、OED *room* adj. の項にある唯一の例で、この語については後にふれる。*griþbruche* の *griþ* は ON からで、この詩ではフランス語からの

pes (1730 peace) と共存していたが、後に圧倒された。筆者の気づいた限りでは、OE の詩語に由来する複合語は見当らないようである。

次に意味の上で注意される語は、ibere (222, 1348 outcry), dreim (21, 314 joyous sound), clude (1001 rock) などである。Anglo-Saxon Chronicle 七五年の項に Cynewulf 王の殺害を知らせる婦人の gebæru が、態度 (bearing) ではなく悲鳴であることは、この詩の他 ME の ibere ⑤ から確かめられている。

同じく Anglo-Saxon Chronicle を連想させる here (1702, 1709, 1790 army), ferde (1156, 1668, 1672, 1684, 1790 army) も頻出するが、意味の上での区別は判明しない。

文法語としては þe について OED は conj. that (941) と conj. than (564) の意味では、この詩の例を最後に行っているが、このような語の場合には、特に目安程度にうけとるべきである。

九

前章で griþbruche (breaking of peace) という複合語を挙げたが、この詩には spusbruche (1368 breaking of matrimony, i.e. adultery) という語も見られる。ところで、spuse は新しい語であるから、spusbruche は griþbruche などにならってつくられた、比較的新しい複合語であろう。この時代の英語の造語能力となると、筆者の手に余る問題であるが、この詩で目立つのは否定辞 no- との複合語である。これは必ずしもこの詩に限ったことではないが、Stanley のテキストのグロスリでは三五を数える。特に注意すべきは次の例である。

Wi atuïestu me mine unstrengþe

An mine ungrete an mine unlengpe,

An seist pat ich nam noyt strong

Vor ich nam noyer gret ne long? 751-4

なぜお前さんは私が非力で

小柄で寸足らずなのを非難して、

私は大きくも高くもないので

強くないのですか。

前半の二行で *un-* を使って表わしたそのままを、後半の二行で言い変えたに過ぎない、といえはそれまでだが、作者が意識的に *un-* の効果を狙ったことは確かだ。 *ungrete* (752 *want of size*) だけはこの例以外にない。

寸足らずのナイチンゲールの方では、梟のことを *unwizt* (33, 90, 218 *monster*) といつてからかうが、*pejorative* な *un-* も残っている。

un- 程ではないが、*to-*, *for-* との複合動詞も各々一〇以上ある。

一〇

これまでの引用からも、この作品のくだけた調子は窺われたであろう。更にこの詩は露骨に卑猥である。 *Early Middle English Verse and Prose* はすぐれた選集で、この詩を最初にかかげ、量的にも三分の一程抜萃しているが、この点を理解するには不十分のようだ。作者は意識的に優雅なものを避け、露骨な卑猥さを強調している。

もいとも obscene といふ一六世紀以来の語はない。否定辞 un- を使えば unclene (91, 223 unclean) となるが、shitworde (286 shitwords, mucky words) とどう他に例のない語もある。牧童がののしりあう折の言葉に使われ、Chaucer, *The General Prologue* の 'a shiten shepherd and a clene sheep' (504) を思わせぬ。

更によく使われているのが ful, uil (foul) で一九回に及ぶ。今日でも foul と owl は語呂がいいが、この詩人も一度だけ fule-hule (1315-6) の脚韻を使っている。ナイチンゲールは鼻にたいして fule を連発し、動詞としても使っている。

Hi fulep hit up to pe chinne. 96

鼻の雛は鼻を髑まで汚す。

大変汚ないイメージが浮んでくるが、鼻も負けずに、ナイチンゲールは人間様の住家といえば、必ず便所で鳴いているとやり返す。

Par me mai pe ilomest finde

Par men worpep hore bihinde. 595-6

お前さんが一番よく見つかるのは

人間様がおしりを突きだす所だ。

bihinde は名詞で、文字通りおしりである。当時の便所は主屋の外、雑草の茂ったあたりにあって、one hole

brede (965) 「穴のあいた板切」がわたしてある程度であった。したがって runhus (592, 652 roomy house) であらう。

fule worde (285) を使うのは梟の言うように、牧童だけではない。二羽の鳥が我を忘れ、お互に不潔な奴とのしりながら、さかんに不潔な言葉を使っているとすると、この詩の面白さがある。

node makeþ old wif urne. 638

必要は老婆を走らせる。

この場合の need は 'offices of nature' の意味だが、*OED* の例より百年近く古い。この語は 'sexual need' (1542) の意味でも使われている。この詩でうたわれている愛は、みやびやかな courtly love に程遠く、露骨な性慾で、golnesse (492, etc. lechery) とも wode res (512 mad impulse) ともいわれる。golnesse は *OE gannes* に由来し、この詩が最後である。鳥の性行為について Chaucer は *The Nun's Priest's Tale* で 'tread' という語を印象的に使ったが、この語の場合には、*OED* での詩の例 (501) が最初である。

卑猥ではないが、卑近な譬え、諺の多いのもこの詩の特色である。鳥ばかりでなく、ape (1325) bareȝ (408 barrow-pig), bore (408 boar), bore (1021 bear), cat (810, 830), nox, fox (812, etc.), hund (375 etc., dog, hound) といったものも登場し、一層 homely な雰囲気をもたしている。

On ape mai a boc bihalde

An leues wenden & eft folde,

The Owl and the Nightingale の英語

Ah he ne con þe bet þarnore

Of clerkes lore, top ne more:

Þah þu iseo þe steorre als wa

Nartu þe wisure neauer þe mo. 1325-30

猿公だって書物をにらんで頁をめくり

また閉じるかも知れないが

それだけ学者になるということは

これっきりもないんだ。

ご同様にお前さんが星を見つめたって

ちっとも賢くはならんよ。

梟がいくら星を眺めてみても、*storre-wis* (1318 *star-wise*, *skilled in astrology*) にはならないと、ナイチンゲールがからかったくだりである。

この詩には、「アルフレッド曰く」といった諺が多く見られるが、一例だけ注意しておく。

Nis nout so hot þat hit nacoleþ

Ne noȝt so hwiȝ þat hit ne solep. 1275-6

冷めないほど熱いものはなく

汚れないほど白いものはない。

イタリック(筆者)にした語が、順序を変えて OE 詩 *The Rhyming Poem* にも見られ、言葉の上でも OE との continuity が認められる。

Searhwit solap, sumorhat colað. 67

但しこの場合には *searhwit* (cunning white i.e. splendid whiteness), *sumorhat* (summer's heat) と同じ複合語を使った、OE の簡潔な表現が優れているであろう。

以上、この詩のことばの諸相について印象を述べた。周知のとく、Chaucer はユーモアに富んだ colloquial な、時に卑近な英語で語りかけるのを得意としたが、その言葉の流れは、更に百五十年も以前のこの詩まで遡っている。「英詩の父」を理解するためには、フランス的イタリア的要素とともに、このように極めてイギリス的な作品も必要であろう。

本稿は一九七二年一〇月八日、中世英文学研究会例会での口頭発表に加筆したものである。

[注]

- ① 『英語歳時記・春』 p. 149.
- ② M. W. Grose & D. McKenna: *Old English Literature*, p. 157.
- ③ W. P. Ker: *Medieval English Literature*, p. 134.
- ④ *Op. cit.*, p. 1. Bennett 氏の註に「surprising' (p. xii) などがある。
- ⑤ *Op. cit.*, p. 64.

- ② *Notes and Queries*, October, 1961, p. 375.
- ③ Tatlock & Kennedy の *ノーン・マーズ・リズ* の *Romance of the Rose* 以外では *Reeve's Tale* の四例だけ (4045, 4089, 4174, 4184) である。
- ④ oral communication.
- ⑤ Sweet & Onions: *Anglo-Saxon Reader*, p. 196.

【註記】

この註は Chaucer との直接の影響関係を立証するのは困難であろう。但し、前述の *feul-owl* の脚韻が一度だけ Chaucer にも見られることは注目される。

For prively he wedded hire on the morwe,
And al day after hidde him as an owle,
So wo was him, his wyf looked so foule.

The Wife of Bath's Tale, 1080-2